

(2) 独立行政法人統計センター運営事業

【林崎官房長】 それでは、時間になりましたので、引き続き本日2件目の案件に入りたいと思います。独立行政法人統計センター運営事業につきまして、担当部局から資料に沿って説明をお願いいたします。

よろしくをお願いいたします。

【説明者】 それでは、統計局のほうからご説明させていただきます。本日も補足説明資料をもとにご説明させていただきたいと思います。

まず初めに、統計センターの業務概要についてご説明させていただきます。2ページ目、3ページ目に概要を書いておりますけれども、こちらは事前勉強会と同じでございますので、説明は割愛させていただきます。

それから、4ページでございますが、こちらは統計センターの組織図ということでございまして、常勤役職員数は部とか課につきまして何人と入れさせていただきました。業務の効率化等によりまして、こちらに書いてあります統計編成部の職員を中心に定員の削減などが行われているとご理解いただければと思います。

それから、5ページ目でございます。こちらは常勤役職員数の推移ということでございます。こちらでも設立時より職員数の削減を続けておりますけれども、閣議決定によりまして平成34年度には514人まで削減するという宿題が課せられているということでございます。このために、下でございますけれども、ICTの活用ですとか業務プロセスの見直しなど後ほど説明させていただきますけれども、例えば細かくてここには書いてございませんけれども、平成22年と27年の国勢調査の比較でいいますと、センター内部での業務量は約30%削減をしております。その削減のおおよその要因の比率で言いますと、オンライン調査ですとか業務プロセスの見直しなどによる効率化が約55%、格付けの機械化が約15%、業務委託約30%ということで、そういったものを組み合わせながら業務削減、職員数の削減に取り組んできておりまして、こういったことをより進めるということによりまして、今後の削減にも取り組んでいきたいと思っております。

一方で、統計改革などによりまして、センターに課された新たな業務、これも後ほどご説明させていただきますが、そういったものが出てきておりまして、これらに対応するための必要な人員増は行っているといったところでございます。

それから、6ページは経費の効率化ということでございまして、こちらでも順次進めているというところでございます。

それから、7ページでございますけれども、こちらが運営交付金の推移ということでございます。年度別に増減しておりますけれども、こちらの中ほどの周期調査経費ということで平成28年度は例えば国勢調査の製表などによりまして経費が大きくなるといったようなことで変動しているわけでございます。このために、業務量全体としては先ほど申し上げましたようにICTの活用とか業務プロセス見直しによりまして全体的な削減を図っておりますけれども、年間の業務量の変動には一部業務を例えば外部委託させていただいたり、非常勤職員を採用するというように対応しているといったようなことになっているわけでございます。

それから、8ページ目でございます。こちらが統計センターの業務概要ということでございます。統計局が実施します国勢の基本となる統計調査の集計、それから国の行政機関、それから地方公共団体の委託を受けて集計を行っております。また、公的統計基盤として、政府統計共同利用システムの運用ですとか、統計法に対応しましたオーダーメイド集計・匿名データの提供、こういったものを行っているということでございます。

この後、9ページから14ページまでは業務内容の説明をさせていただいておりますけれども、勉強会と同様でございますので、こちらの業務の説明は割愛させていただきたいと思っております。

15ページ以降の業務の効率化等への対応をご説明させていただきます。

まずは、16ページでございますけれども、小売物価統計調査でございます。こちらは視察にも来ていただきましたが、調査員が消費者物価指数等の商品価格を直接タブレット端末に入力するというところでございまして、その情報を直接統計センターシステムに送信するというところで、「100%オンライン化」を実現しているということでございまして、こういったことによりまして、要員投入量の効率化を図っているといったようなものでございます。

それから、17ページをごらんください。こちらは分類符号の格付けの自動化ということによりまして業務の効率化でございます。紙の調査票が返ってまいりますけれども、こちらについてはOCR機器で読み取りまして画像データにしまして、それを文字認識させた上でルールベース化した格付支援システムによりまして機械で格付けをしているということでございます。これによりまして、従来人手でやってきた業務を機械化して効率化しているということでございます。

18ページを見ていただきますと、これが例えばオンライン調査で調査票が返ってきた

場合ということでございます。こちらは先ほどの紙の調査票に比べまして、オンラインで返ってきた場合には、OCRなどの読み取りなしで直接格付けが行えるということでございますので、読み取り精度によらないということになりますので、紙の調査票に比べまして格付けも高くなるということで、効率化をする水準も高くなるといったようなことでございます。

19ページでございますが、これらの格付けを自動化したことによる削減効果をお示しております。格付けする内容等によりまして削減業務量には変動がありますけれども、例えば26年の経済センサス基礎調査でございますと1万6,812といったような認知の削減が、従来人手でやっていたものが機械によってできたといったようなことを示してございます。こういったものを通じまして合理化を図っているということでございます。

続きまして、20ページです。こちら、これまでご説明しましたのはルールベースで格付けをするというシステムではございますけれども、20ページはこれを発展させてまして、既に職員により正解の収支項目分類符号が格付けされた過去のデータなどを活用して、これをAIに入れまして、格付け自動化の割合をさらに増やしていこうというような研究をしております、こういったものを進めることによってさらに業務量削減に取り組んでいきたいといったような中身でございます。

それから、21ページでございますけれども、こちらの業務のプロセスの見直しということで業務を効率化しているというものでございます。これまでは統計センターでは上の図のようにそれぞれの工程ごとに段階を踏みましてチェックをおこなっていたわけでございますけれども、そのプロセスを変えて業務の情報基盤というデータベースをまず構築をいたしまして、この基盤を中心に業務を行うということによりまして、製表や情報提供の業務を効率化しようという取り組みということでございまして、22ページのほうに効果を図示をさせていただいておりますけれども、これによりまして製表業務のプロセスの改善でございますとか、データを実際に統計表などを公表しておりますe-Statなどへのデータ登録業務の効率化、それから二次利用のために匿名データ、それからオーダーメイド集計なども行っておりますけれども、そちらの二次利用基盤へのデータ登録業務の効率化などが図られるものと考えておりまして、現在このようなデータベースを基盤とするような業務への移行を順次図っているといったところでございます。

最後に、統計改革に対応した新たな取り組みについてご説明させていただきます。23ページでございますが、こちらが今般の統計改革に対応した公的統計基本計画における統

計センターの関係箇所というところがございます。主なところを次のページからご説明させていただきます。

まず、24ページでございますが、これはプロファイリング活動の説明でございます。これは主に経済統計調査の精度向上のために、公的機関の職員が統計の結果精度に与える影響や調査負担の大きい大企業に対しまして担当者を決めまして、その担当者が担当企業の合併・分割、それから事業所の改廃の確認などを行うということございまして、主要国で既に実施されているものでございます。今回の統計改革によりまして統計センターで実施するというところにされたものでございます。

続きまして、25ページでございますが、こちらはオンサイト施設の説明でございます。これは統計法に基づきまして調査票情報を提供する際に、高度な情報セキュリティを備えてその場限りで安全に調査票情報の利活用を可能とする施設というものでございます。公的統計の基本計画におきましても、調査票情報の提供につきましてオンサイト利用を中心とした利用形態の移行というものを視野にオンサイト利用の全国的な展開を行うということにされておきまして、その任を統計センターが負っているということになってございます。

最後、26ページでございます。以上、統計センターの現状についてご説明させていただきましたけれども、320人の削減の対応としましては、業務の効率化として格付けの自動化とかそういったICTの活用ですとか業務プロセスの見直しといったようなことを推進しているところでございます。センターにおきましては、定員削減を踏まえまして率先して業務の効率化を進めていくということでございますけれども、プロファイリングでございますとか統計データ利活用のための取り組みなど、統計改革への対応につきましては必要なリソースは確保していきたいと考えております。説明は以上となります。よろしくお願いたします。

【林崎官房長】 ありがとうございます。

事務局から、議論すべき論点について、紹介をお願いいたします。

【二宮会計課長】 論点シートをごらんいただければと思います。本件事業につきましては、論点1件でございます。製表業務の実施に当たっては、定員削減を踏まえ、ICTの活用、適切な人員配置、機動的な業務体制の構築などにより、効率的・効果的な業務運営がなされているかということでございます。

【林崎官房長】 それでは、ご議論をお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。

ます。

上村先生。

【上村】 ご説明ありがとうございます。関西学院大学の上村です。

先ほど「事前勉強会と同様なので」と説明をはしょった部分があったと思いますが、今日は公開プロセスということで、インターネットで初めて説明内容を聞く人もおられますので、非公開の事前勉強会で説明したから今日の本番で説明をはしょるとするのはちょっと理由にならないかなと思います。やっぱりそれがユーザー目線なのかなと。

その話と今からの話がつながってくるのですが、レビューシートにあるアウトカムが総務大臣の評価になっていますよね。これはセグメントシートも全て同じアウトカムになっています。統計センターの性質から言うと、極めて国民生活に近いサービスをなされているということなので、やはり皆さんが実施されているサービスは、ユーザー目線からのアウトカムを設定する必要があると思っています。私自身も統計センターのデータを使って論文を書いてきたユーザーですし、匿名データの申請もやったことがあります。その点から言っても、ユーザー目線のアウトカムを設定していくことが、皆さんにとっては必要です。例えば、ホームページのe-Statのアクセス数であるとか、データの利用数、論文の引用数とか、また、作表をされていますけれども、発注から受け取りまでの時間がどうなっているかとか、そういうものも考えられるんじゃないかなと思います。

それと、これは総務省の会計課の方にお聞きしたいんですけども、これは本事業とかかわる話じゃないんですけど、所管の独立行政法人にはほか2つございまして、情報通信研究機構とあと郵便貯金・簡易生命保険管理機構があります。こちらも同じように、総務大臣による評価がアウトカムになっているんでしょうか。今わかればちょっと話をさせていただければと思います。

【二宮会計課長】 今ご指摘いただきました2つの独立行政法人につきましても、同様の評価でございます。

【上村】 わかりました。

【説明者】 説明の内容の集約につきましては10分という制約がありましたので、主なところをご説明させていただきました。申し訳ございませんでした。

それから、レビューシートにつきましては、今のような状況ではございますけれども、主要なものとしては例えば統計センターですと集計がスケジュールどおりに行われているかとか要員投入量が前回調査と比較してどうだったかとか、あとは委託元からの満足度が

どうだったかとか、あとシステムでいえば運用が継続的になされていたかどうかと、そういったようなさまざまな項目について評価を行っておりますので、それをどう表現できるかといったようなことについては、今そういう意味では取りまとめたものとのセットで見ただけの形にはなるんですけども、このレビューシート上でどう表現できるかというのはまた相談していきたいと思っております。

【上村】 ありがとうございます。別にアウトカムが1つじゃないとだめというわけではなく、複数あっても大丈夫です。総務大臣の評価がだめと言っているわけではありません。それもあっていいんですけども、やはりユーザー目線のアウトカムを設定していくのが大事なのかなということです。

【林崎官房長】 ありがとうございます。

そのほか先生方、いかがでしょうか。

楠先生。

【楠】 楠です。先ほどの質問と重複するかもしれませんが、やはりこのアウトカムというのが他者からの評価がアウトカムであって、それを我々が評価するという変な話になっていると思うのですよね。ですので、そもそもどういう目的でどういったことをやろうとしていて、それがいかに達成できているかということを経験しやすいような形で出させていただいて、それを評価するという形のほうがいいと思うんです。目的は先ほど事務局のほうから論点ということが出てきましたけれども、効率的・効果的な業務運営がなされているかという論点を出されて、アウトカムがAやBで平均Bでしたと。Bというのは実はAのようなものと前の説明会でありました。要はAとは前に改善できていない部分があったので改善した。Bはもともとうまくやっていたものをちゃんとやったという。それがこの論点に対応するのかという話になってくると思うんです。

ただ、なかなか難しいのが、製表作業とか統計それ自体だと何をもってアウトカムかということ自体が難しいと思うんです。ただ、例えば研究とか国際協力とかいったことについてさすがにAとかBとか、4点が滞りなく平均Bですとちょっと議論しにくいというのは事実ですよね。先ほどの指摘にもありましたように、やはり外に対してそういった統計データというものを出せる範囲できちんと使ってもらおうということであれば、それがいかに使われていて、それがいかに社会生活あるいは研究に役立っているのかといったことが、何らかの形で具体的に議論されるべき形で出てくるのが自然な形なのかなと。

ここからは質問なのですけれども、先ほどなかなか難しいというふうに申し上げたんで

すが、アウトカムの中の、レビューシート12ページですか、統計の製表業務ですよね。これが目標値を超えていると。目標値はBが平均になっているはずなので、それを超えている数値が出て110%の達成率になっているということですよね。ということは、何か100%を上回るということは、前に改善しなきゃいけない部分があってこれが改善されたからこそ10%の積み増しがあったというふうに理解できるんですけども、その辺はいかがなんでしょうか。具体的にどの辺のことなのかを教えてください。

【説明者】 ちょっと詳細を見てみないとあれですが、おそらくで恐縮でございますけれども、要員投入量をもともと予定していたものがございまして、それを業務改善をしてそれを削減する、その削減度合いが大きければ評価がプラスになるといったようなものがございます。もちろんきちんとした要求どおりのものを期日どおり出すというのができてBになります。それに加えて、要員投入量を予定したよりも少なくできたとなるとプラスとなりますので、おそらくそこら辺の換算だと思われま。

【楠】 ということであれば、やっぱり分けをして議論をしないと、何がBなのか何がAなのかわからない。一つの説明としては、やはり効率的、効果的というのがあれば、同じことをやっているんだけど投入する労働力というものが少ないほうが効率的だということと言えますので、それが指標になっているのであればそれがどれだけ達成できたのか。ただ、業務それ自体はきちんとされていますということはやはり分けて議論したほうがいいと思います。

【林崎官房長】 ありがとうございます。

瀧川先生。

【瀧川】 ご説明ありがとうございます。瀧川です。

この事業の費用は75億円ぐらいあり、その中で8割が人件費ということなので、やはり生産性をいかに高めるかという点が大事になると思っています。

そのときに、世の中に全く同じ業務を行っている会社があるわけではないので難しいと思いますが、センターとして現状の生産性の水準をなにかしらの方法で把握する必要があるかと思います。過去にどこかの会社とベンチマーク比較をなされたかどうかという点と、もしベンチマークをなされたのであれば、そのときにセンターとしてどのように評価されたかを伺えればと思います。

【説明者】 特にベンチマークといったところで何かはっきりとしたものがすみません、ちょっとすぐには思い浮かばないんですけども。ただ、例えば格付けを外の会社に出す

といったようなときには、センター内部の職員がやれば大体人日でこのぐらいかかるだろうといったことで入札なりをやります。それに基づいて、民間会社にやっていただいて、格付率、どのぐらい正確にやっていただいたのかということでもってその会社を評価して、それがうまくいけばまたどんどん外に出していくといったようなことはやってございます。

【瀧川】 ありがとうございます。これからも効率化を進めていかなければならないという状況にいらっしゃる中で、ICT活用という大型の打ち手で効率化するのは当然大事ですが、結構費用はかかります。その中で、一つ一つは小さいかもしれないですけども、業務改善を積み上げることによる効率化も大事になると思います。全く同じ業務を行っている会社はないにしても、何かしら類似の業務を行っている会社と生産性などを比較することができれば、また新しい改善余地が生まれてくるかと思えます。

【説明者】 1点だけ申し上げさせていただきますと、我々例えば周期調査といって5年ごとに同じ調査をやってまいります。5年前の国勢調査、5年後の国勢調査。その時に、前回の国勢調査で職員がどのぐらいの業務量だったのか、次にその間の5年間における改善点でどのぐらい業務を改善してきたのかで次の5年間の国勢調査をやります。さらに、そのやっていく中でも業務を少しずつ積み上げながら、まさにおっしゃるように業務の改善を見ておりますので、ある意味前回との比較もベンチマークになっているのかなという気はいたします。

【瀧川】 ありがとうございます。ただ、内部のベンチマークはあくまでも内部との比較になりますよね。内部ベンチマークだと以前よりは良くなったという話だけになってしまうので、もし可能であれば他の事業者との比較ができると、もしかしたらこういうことも新しくできるかもしれないというようなアイデアが生まれるかと思えます。

【説明者】 そうですね。外部の知見なんかを利用するというのは非常に重要だと思いますので、引き続きそういうことに取り組んでいきたいと思っています。

【林崎官房長】 ありがとうございます。

西出先生。

【西出】 効率化という点でかなりいろいろと取り組まれているなと思いますね。その文脈の中でいろいろとデータをどう使われるかの話とか生産性の向上という話が出ていて、1つとして多分ぜい肉を取るという意味ではかなりご苦労なさっているんだろうなというところがあると思うんですけども。生産性の向上とかデータをより使っていただきましょうという視点から考えると、すみません、ちょっと論点がずれちゃうんですけども、

筋肉をつけるという意味でこちらの26ページに書いてある統計改革の対応の中で、今の状況的に一番上のEBPMの関係とか統計ニーズへの的確な対応と書いてあるのを今後どのように進めていくのか。多分、ちょっと読めないところはあるんですが、ここであるデータを政策分析としてかなり活用できるのではなかろうかというような推測があり得るのであるならば、このデータを使われるという意味で書く——こちらに書いてはありましたが、府省の皆さん、もしくは地方自治体の皆さん等々に使うという話とか、加工して提供するとかという話もあり得るのではないかなと思うんですね。その辺を筋肉をつけるという意味でちょっと解釈させてもらおうと、今後どのようにお考えになっていらっしゃるのかということをお聞かせいただければと思います。

【説明者】　　ここは統計センターだけじゃなくて統計局も含めて取り組んでいるわけですが、この中の資料にもございますe-Statなどによって基本全府省の統計についてはそこからポータルサイトみたいなのところでももちろん使っていただけるようになっています。その使い方も、例えば今表だけをお届けするというよりは、機械から自動で読み取れるような形式に変換をして、自動的にユーザー様がデータを更新できるようにしようといったような取り組みですね、今まさにデータの高度化の取り組みを順次進めているところでございます。

それから、今回の統計改革の中でも、二次利用とかそういったものが非常に重要になってくるといったような認識でございますので、既存の統計表だけではなくて、それをさらに活用していただいて、新たな分析をしていただけるような調査票データ自体の利用ですとか、あとはそれを少し匿名化してもう少し利用しやすくしたり、そういったことも含めてさまざまな利活用のための取り組みを進めていきたいと考えておりまして、センターと協力して取り組んでいきたいと考えています。

【西出】　　希望としては、積極的にデータを使ってもらうためにどう、セールスという言葉はおかしいですけども、売り込みというのはあるのかなというふうに思います。

あと、先ほどベンチマークという言葉が出たので、海外でもこういうようなことを行っている実施機関があると思うんですけども、そういうところの比較分析等々ということは行われたことがあるのかなのか。あるのであるならば、その辺で何らかの特徴が見出されたことがあるのかとか、ないのであるならば、比較はしなくても何か学べる点があるとかないとか、結局ベンチマークの話になっちゃうんですね。海外との関係で何か今後のセンターのあり方を考えていくというんで、何か学ぶべき点等々があるとお感じになっ

たことがあれば、ご教示賜りたいと思います。

【説明者】 データの利活用の観点でいいますと、主要な国はほとんどやっぱり e-S t a t みたいなものでデータを提供していますし、そういったところから二次利用が使えるようになってきているかなってないかとか、いろいろな使い方のハードル……。それは国の法的なものとの関係もございまして、法律の範囲内でできるだけ使いやすくということ提供がなされているのかなと思っていまして。今回の統計学の中でも、先進国により近づくような二次利用が進むような形で法律の改正も行われましたので、より先進国に近づくような形で二次利用の提供ができる環境は整ってきていると思いますので、先ほどご説明させていただきましたオンサイト施設だとかそういったものをできるだけセンターと協力しまして整備を進めていきまして、データの利活用がより進むように取り組みを進めていきたいと考えております。

【林崎官房長】 ありがとうございます。

引き続きご議論をいただきつつ、そろそろコメントシートへ必要事項の記載をお願いいたします。

コメントシートにつきましては、15時15分ごろを目途に事務局職員が回収させていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、いかがでしょうか。

石井先生。

【石井】 先ほど来の議論とかぶってしまうんですけども、レビューシートの方でセグメントごとにきっちりセグメントシートということで各セグメント名、事業ごとにレビューシートを起こされておりますので、やはり先ほど来同じ話になってしまうんですけども、このセグメントごとにやはりアウトカムの設定というのをすることによって、すぐわかりやすくなってくるのかなと、ちょっと感想みたいで恐縮ですけども、そういう気がいたします。

どうしても議論の方向が効率的・効果的などという話になってしまうともっと削れみたいな話になりがちかなと思うので、先般視察もさせていただきまして非常にいろいろな取り組みをされているなど——これも感想ですけども——したところで、じゃあ今度それをどうやって測定していくのかということについては、冒頭の上山先生と同じになってしまうんですけども、せつかくセグメントごとにきっちり分けていच्छるのに、それが何かちゃんと反映されていないというふうに見えてしまいますので、そういうふうにな

れるとよいのかなという気がします。

その中で1つのセグメントだけちょっと取り上げさせていただきますと、受託製表事業ということで受託をされていると。受託事業ですよ。これは国の行政機関または地方公共団体から委託を受けて行うというところなんです、この委託される件数というのは伸びているという理解をしてよろしいでしょうか。ちょっとすみません、やはり今オンラインでできるようにということではいろいろな取り組みがされていて、オンラインでできるということはコストが減るといってもそうなんですけれども、いわゆる回答する側の負担も減るといところで、こういった統計の基本原則の一つというんですかね、回答者の負担を軽くするというところ。一方で、各省庁さんがいろいろなことをやっていたら、いまだに私のところに紙で来たりとかいうのがある中で、そういったところを逆に積極的に統計センターだったらこんなことができるぞと、そんな簡単な話じゃないかもしれないんですけれども、少なくとも委託が増えている、また増やしていく方向かとか、そういったところがあるかどうかだけお聞かせいただければと思います。

【説明者】 今のオンライン調査の話で言いますと、国の統計調査、基本的にはオンライン調査を導入するという方向になっておりまして、そういう意味ではほとんどの統計調査がオンライン対応になってきている。一部ちょっとまだ難しい調査もあるかと思いますが、そういう意味では、統計センターのほうでオンラインシステムの基盤は共有して、オンラインシステムをやる省庁についてはそのオンラインは基本統計センターのシステムを介してやるということになっていますので、そういう意味での統計センターの業務というのは拡大はしてきておりますし、全体の効率化には大きく資しているんじゃないかと思っていますので、そういった取り組みをさらにちょっと。オンラインって基本的には徐々に状況が変わってくると上がっていくと思いますので、基本的にはそういったものが進んでいくんじゃないかなというふうには考えております。

【石井】 わかりました。ありがとう。

そうすると、生産性という切り口でいったときに、やはり同じシステムの中でこれだけのことができていくというような議論にもつながるのかなと思いますので。以上です。

【林崎官房長】 ありがとうございます。

上村先生。

【上村】 先ほどはちょっとアウトカムの話をしていただいたんですけど、今からは業務効率化の話です。

業務効率化の取り組みですが、私は専門ではないけれども、ただ見た感じはとても先進的にやられていて、やっぱり統計センターだなというような気がしています。ところが、その取り組みが、レビューシートに入っていないというのが、行政事業レビューとしては問題かなと思っています。たとえば、単位当たりコストがどういうふうに移すのかとか、そういうところは入れていかないと見えてこないですね。業務効率化でやっていることのよさが、レビューシート上に出てこないというのは、行革上はちょっと残念です。だから、やはりある程度、シートに落としていく努力というのは必要なかなというように思っています。

あと、今からの話は、統計センターの話とはちょっと違うんですけども、やはり皆さんのやられている業務効率化の取り組みについては、横展開ができるような話なのかなと思っています。もしもできるんだったら——できるかできないかは、私は専門家じゃないのでわからないんですけども——できるんだったら、他省庁や地方自治体の方々に、こういう展開ができますよ、ということを紹介していただくと、業務効率化で悩んでおられる自治体の方々が結構多いので、そういう仕掛けを期待したい。もしも、そういう仕掛けをやられるんだったら、それもまたアウトカムとして、捉えていかないといけないのかなと思います。

それと、これはほとんど意見ですが、プロファイリングは非常に私は大事だと思っています。企業の場合が非常に多いですけども、企業の方で統計の書き方を誤解されている場合が結構あるんですよ。そうすると、国の統計上、そういうものが誤差として入ることによって、私は税収の配分とかも専門でやっているのでも、そうすると税収配分をするときも、かなり影響してくるところがあります。ということも考えると、やはりプロファイリングをして、きっちり統計の意味をわかっていただくということは、すごく大事だと思います。プロファイリングという新しい試みについても、どこが改善できているのかについて、アウトカムとしてどうやって捉えるかという努力は大事なかなと思いました。これは意見です。

【林崎官房長】 ありがとうございました。

【上村】 もしコメントあれば。

【説明者】 そうですね、そういうことでちょっと新しい、プロファイリングはまだこれからやるということで今準備に取りかかっているところでございますので、これからちょっと評価の仕方はよく考えていきたいと思っておりますし、このようなセンターの取り組みに

については、いろいろな場でいろいろな方々にやっていることを説明というのが、全体としては役立つ方々もいらっしゃるかもしれませんが、そういったことにも努めていきたいと考えております。

【林崎官房長】 上村先生、よろしゅうございますか。

【上村】 大丈夫です。すみません。

【林崎官房長】 そのほか、いかがでございましょうか。

瀧川先生。

【瀧川】 26ページに記載のとおり、これからの効率化対応としてICTの活用がメインになってくると思います。効果も大きいと思いますので。

その点で1つ質問差し上げたいのは、19ページに格付支援の削減効果とありますが、業務量としてこれだけ減りましたという記載はあるのですが、このようなシステムを入れるときに考えるのは費用対効果で合うか合わないかという話かと思えます。実際このシステムを入れたときの費用対効果はどうだったのかということをお伺いしたいと思います。かかった投資と、それに対する金額ベースでの効果のようなものです。

【説明者】 費用対効果で幾らというのをはっきりと出したものは、ちょっとすみません、もしかしたらないかもしれないんですけども、ただ、我々がやっている中でプログラムをすぐ改変しなければいけないということもありますので、内製でプログラムをつくらせてこういうシステムを導入している部分も相当ございます。あとは機械、ハードを買ったりというのも当然ございますので、そういったことも考えながらきちんと今後もやっていきたいと思えます。ありがとうございます。

【瀧川】 これからの業務効率化の中でICT活用は重要な取り組みだと思っていて、費用対効果が合っていないのではないかと申し上げているわけではなく、一時的にシステムを入れて投資がかかっても中長期で見るとコストが下がるものもあると思うので、そういったものは必要な予算と考えられますし、費用対効果を見きわめながらどの業務をICT化していくかということを検討していただければいいかと思えます。

【説明者】 ありがとうございます。

【林崎官房長】 ありがとうございます。

ただいま、北大路先生のほうで取りまとめ、コメント案等作業いただいておりますけれども、引き続きご議論いただきたいと思えます。いかがでしょうか。

西出先生。

【西出】 すみません、先ほどの統計改革への対応のEBPMとかお話しさせてもらったんですけども、具体的にいつごろをめどにこの辺のEBPMや統計ニーズへの的確な対応というところの対応の仕方が具体的に見えてくるのかなというのがちょっと関心があるんですけども。何かこのまま「的確な」という言葉がうやむやな中でふわふわふわとになってしまうのは非常にもったいないものですからね。何年か後、もしくは来年から再来年かをめどに、こういうことについてはこのような形で対応していくみたいなどころがあればお教えいただきたいのと、先ほどの海外の話もちょうとよくわかりかねたんですが、具体的に政策分析にまでコミットメントしている統計的なセクションというのはどうなんですか。先進国の話がさっき出たんですけども、具体的にどういうところがあるのかというところをお教えいただけたらと思います。

【説明者】 EBPMの推進については、全体としては各省にEBPM推進のための組織が設けられたりとか、またそういった担当の方々が集まった会議ができたりとか、そういったところで全体としては進みますし、あと人材育成はまた別途研修のこともしてやっていこうということになっていますんで、我々としてはこの23ページにありますような基本計画の中で、こちらが行政の統計計画の中でEBPMの推進も含めて統計センターとして実施すべきことということで閣議決定された中身でございまして、それがまさに先ほど申し上げましたようなプロファイリングでございまして、オンサイトを中心としたデータ提供の仕組みをきちっと整備をして、皆さんに二次利用をさらにしていただけるような基盤をつくっていくというようなことになってございまして、こちらが閣議決定の実施時期としては、平成30年度からできるだけ速やかに実施をしていくという中身になっておりまして、今そういったことを飛躍をするために順次準備をしているといった段階で、できるだけ早くこういったことができるように、人なんかの人材の体制の整備なんかも含めてしていかなければいけませんので、そういう準備をできるだけ早く進めていきたいなと思っております。

ちょっと先生の質問の後半の部分が……。

【西出】 あ、ごめんなさい。海外でこういうような統計、分析等々を進めているセクションが積極的に政策分析等々にコミットメントしているようなところがあるのかな、どうかというところがあれば教えていただきたいなということです。

【説明者】 そういう意味で言うと、オンサイト施設の担当みたいなどころは結構やっぱり通常の分析じゃない分析を政策的にやるということで、政府系の研究とかそういった

ものを、そういった施設を使っているいろいろなデータを組み合わせて分析しようとか、そこで行政記録も含めて分析しようとか、そういったような取り組みをしている例はあると思いますので、そういったのが一つの例かなというふうには思いますけれども。

【西出】 わかりました。

【林崎官房長】 よろしゅうございますか。

そのほか、いかがでしょうか。

上村先生。

【上村】 まだ時間大丈夫ですか。

【林崎官房長】 大丈夫です。

【上村】 業務改善の話です。自治体の行政改革の関係で話をしていると、業務改善の話が結構出てくるんです。私はICTの事情はあまりよくわかってないんですが、ICT化する場合とまだ人手でやらないといけないところの線引きというのは、どういう考え方に基づいて行っておられるのでしょうか。それをちょっとお聞きしたい。私の興味でお聞きしています。

【説明者】 例えば、単純なお話を簡単にさせていただきますと、この先ほどの資料でルールベースで格付けをしているといったことを機械化してありました。ルールベースというのは、例えばもう男だったら自動的に1番という番号をつける、女だったら2番という番号をつける、キャベツだったら3番をつける、トマトだったら4番をつけると、もうそれで決まっているようなものであれば、もうトマトと記入されていれば自動的にそういうルールで決まっていくと。

一方で、困難度が高くなってくると、よく引かれる例として、秋になると「かき」を買いましたというのがあります。漢字で書いていただけると果物の柿なのか、あるいは海産物のカキなのかわかるんですけども、今ひらがなで「かき」と書かれたときに、プロミたいな人がいて、その人が周りに鍋物と一緒に買っていればこれは海産物だなとか、あるいはこのうちはよくフルーツを買っているとなると、これは果物の柿だなといったようなものがございます。そういったようなものもAIなんかを使ってどんどんICT化できたらいいなということで、今研究は進めているところでございます。

【上村】 なるほど。今現状はもうそこは手作業になってしまっているということですね。

【説明者】 という部分もございます。

【上村】 ありがとうございます。

【林崎官房長】 ありがとうございます。

まだもう少し時間がございますけれども、いかがでしょうか。

【上村】 なければ、いいですか。

そうすると、今現状まだ手作業になっているところがあるということは、そこがICT化していくとより人件費の部分についてはコスト抑制ができる余地がまだあるというふう
に考えていいですか。

【説明者】 はい、まだ多少はあると思っております。どのくらいあるかというところはちょっとまだ難しいところではありますけれども、あと開発にかかる時間とですね。

【上村】 わかりました。

【林崎官房長】 石井先生。

【石井】 時間をつなぐわけじゃないですけども。せっかくなんで、今のお話、資料20ページにAIというのがあって、決してはやり言葉とかじゃなくて今もう待ったなしみたいな話。大体これいつぐらいまでにはとか、そういう目標感というのはお持ちなんですかね。

【説明者】 できるだけ早くとは思っておりますけれども、すみません、具体的に実装にいつというところまではちょっとまだ難しいかなと。

【石井】 そういう意味では、今の統計センターさんの中計というか、そういう中ではまだここまで具体的に落とし込んでいる段階にはないという理解ですか。

【説明者】 まだそこまではというあれですが。

【石井】 わかりました。

【説明者】 ただ、AIと言えるかどうかはあれなんですけれども、この例でもありませんように、例えばOCRの読み込みなんかですと、昔ですとかちりと全部の文字書いてなかったら読めなかったものが、1字、2字飛んでいてももうこの例ではクエスチョンと書いてありますが、1字、2字飛んでいてもこれはこうだと正確に判断できるようなことを格付けの正確性を見ながら今やっていたりもしますので、そういう意味では少しずつ今実装をやっていると。それをどこまでAIと言えるかどうかというのはありますけれども、いろいろな機械も工夫しながらやっているところでございます。

【石井】 それをAIというかどうかはあまり議論の本質じゃないと思っているんですけども、例えばそういう中で一字飛んでいても類推できるようになりましたとか、そ

ういったことで、これも先ほど来の繰り返しですけれども、どのぐらいそういうことによって、それは多分時間ではかってそれを貨幣価値に換算するみたいになると思うんですけども、そういうのが測定できてくると、私はやっぱりどっちかという測定の問題かなと思っていて、今やっつけていらっしゃることをどう測定していくのかというところが、僭越な表現をしますけれども、ちょっと足りないのかななんて思っていて。そのあたりの測定がもう少しできるようになると、すごく前向きな感じになるのかなという感じが。ちょっと最後は感想なんですけれども。

【説明者】 ありがとうございます。

【林崎官房長】 よろしいですか。そのほかいかがでしょうか。まだもう少しお時間がありますけれども。

この辺でということであれば、北大路先生から各先生に記載いただいたコメントシートから代表的なものをご紹介いただいた後に、票数の分布、評価結果案及び取りまとめコメント案をご発表願います。よろしくお願いいたします。

【北大路】 ありがとうございます。

皆さんのコメント、全般的に非常に好意的で。例えば、効率化への努力とその成果に対しては高く評価します。私、ずっと公プロやっていますけれども、初めてですね、こういうすばらしい評価があったの。同センターの社会貢献を可能な限り具体的に議論しやすい形で情報提供していただければと思います。

実は、この評価、ちょっと後でまた先生方にお諮りしたいんですが、評価の4に廃止から現状どおりまであるんですが、対象事業を有益な、強力で推進するという、ちょっと違うカテゴリーのコメントができるようになっていまして、これを書くべきだというご意見が出ています。もっと頑張れみたいな話なんです、すばらしい。それからあと、アウトカムに関しては、やはりご不満な意見がたくさんあった。「総務大臣がいけないわけじゃないけれども」と書いてありますが、しかしやはりユーザー目線、利用数とかアクセス数とか論文引用数とかデータの提供の効率性とかそういうことも反映すべきだと。そのアウトカムに関して、効率性に関するところで大変頑張っているにもかかわらず、それがレビューシートに書いていないのは残念であるというご意見があります。

それから、効率化に関しては、効率化の手法をもっと増やすことができるのではないかと、ICTだけに限らずに他社のベンチマークから学んで生産性の向上を図ると。これも議論に出ていましたけれども。それから、格付け支援システムの中のICTは効果があるので

あれば予算を増やしてもいいんじゃないかと。大丈夫かな、こんなこと書いちゃって。そうお書きになっています。それから、EBPMとか政策分析に資する、それに使える取り組みを強化していただきたいということです。

ごめんなさい、先ほどアウトカムのところで1つ飛ばしましたけれども、セグメントごとにアウトカムが設定できるのではないかという、明確にお書きになっています。

悩ましいのが、先生方にちょっとお諮りしたいんですけども、現状どおりが3票で一部改善が3票なんですね。中身を読むと非常に好意的なんです。おそらく改善というのはもっと頑張れという意味なんだと思うんですけども。

【上村】 よろしいですか。

【北大路】 お願いします。

【上村】 自分の結果は言わないほうがいいですね。現状どおりというのは、特段見直す点が認められない場合ということなので、このままでいいということだと思えます。それはアウトカムの見直しもしないでいい、ということも含めてなのか、含めてないのかというところを、議論すればいいんじゃないかなと思います。

【北大路】 なるほどね。事業そのものの見直しではないけれども、例えばそういうものの出し方とか伝え方とか、そういうことについて改善ができるのではないかという部分なので、それをじゃあちょっと独断ですけどもやっぱり激励のために一部改善というところで、3票・3票ですが一部改善というところにまとめさせていただくことで、中身は心配していただかなくて結構だと思います。そうさせていただいてよろしいでしょうか。ありがとうございます。

コメントですが、今一番皆さんに共通だったのが、アウトカムの表現ですね。事業レビューにおけるアウトカムの記述について、よりユーザー目線に立ったアウトカムを設定するようにお願いしたい。それからできればセグメントごとにもアウトカムを設定してほしい。もう一つ、何人もの方がおっしゃっているのは、効率化の把握の仕方ですね。ベンチマークの話が出ましたけれども、類似業務を行っている他者との比較とか海外との比較ができるのであれば、ぜひそうやって把握してほしいということですね。これが2点目です。それから、もっと当センターの社会貢献度、社会貢献の内容をわかりやすく情報提供すべきであると。それから、効率化を進めていることがレビューシートに反映されていないのは残念なので、ぜひレビューシートにそういう効率化が進んでいることを表現できるようにしてほしいと。最後に、政策分析に資する取り組みをしてほしいというようなことで

まとめたいと思います。ありがとうございます。いいですか、言わないですみません。

【石井】 ちょっとだけいいですか。すみません。

ちょっと補足というほどの、私はあれですけれども、アウトカムの設定がというところが出たんですけれども、一方で、ややもするとちょっと評価できないという正直なところもございます。アウトカムをよりわかりやすく測定、我々が見てなるほどと思うような測定をしていただくことによって、おそらく今の議論は私もそうだと思うんですけれども、例えばホームページの閲覧数とかダウンロードの数はきっと増えているだろうとは思っているんですね。でも、それがいざ測定していったら、実はまだあまり知られてなくて、いろいろ先般 e - S t a t ですか、画面も見せていただきましたけれども、ああ、なるほど便利だなとは私は思いましたけれども、実際それが今何万件と出ていますけれども、本当に増えているのかとかどのぐらいのページビューがあつてだとか、やっぱりそういうのを測定されていると思うんですけれども、測定してそれを見て行って、でやっていることが間違いないだとか、なかなかちょっと正直に申し上げるとちょっと評価しにくいなという部分があったのも事実ですので、ちょっと補足というか、させていただければと思います。

【北大路】 今のは補足ということで。

そういうわけで、先ほど来申し上げているようなコメント、アウトカムに関する追加になりますけれども、アウトカムをユーザー目線のを追加すると。今の難しいっていう書く必要が……。いい？

【石井】 ああ、いいです、いいです。

【北大路】 それから、効率化の把握について、ベンチマーク等いろいろやり方をお考えいただきたいということですね。それから、社会貢献を可能な限りわかりやすく情報提供する。それから……。あ、すみません、一つ重要なのを忘れていました。今の効率化の把握の中で、システムの費用対効果等を把握するというのも効率化の把握の中では重要な部分だと思います。それを入れます。それから、効率化を進めていることをレビューシートに反映するべきであると。最後に、政策分析に資するようにしていただきたいということでコメントしたいと思います。ありがとうございます。

【林崎官房長】 ありがとうございます。それでは、2件目の議論をこれで終えたいと存じます。

3件目の案件につきましては、この後15時50分から開始したいと思いますので、よ

ろしくお願いいたします。